４．Ⅱ期の報告

次の①～②の講座を受講した。

① 教師が使えるカウンセリングの技法

教育相談では「教師のポジション」がポイントとなる。『ワンアップポジション』は教師が生徒よりも一段上の立場である。これは教師が教壇に立ち、子どもたちが教師の話を聞いている場面などである。教師が伝えようとしていることの意味を子どもがくみとる。『ワンダウンポジション』は教師が生徒よりも一段下の立場である。これは教師が生徒の内面をキャッチし支援する。子どもが伝えようとしていることの意味を教師がくみとる。この２つのポジションを教師が意識的に変化させることができないと、生徒１人１人の感情に目を向けることは難しい。場面に応じて、自分の立ち位置がどちらなのかを意識して生徒と向き合うことが必要だと再確認できた。

また、教育相談で必要となる傾聴の演習として、『お願いコンシェルジュ』というペアワークを体験した。コンシェルジュ役とお客様役に分かれ、コンシェルジュ役はお客様の願いを細かく聞いてお手伝いをしてあげるというものである。コンシェルジュは、すぐに「はい、承知しました。」で終わらず、お客様の心の声を引き出すことに努めなければならない。実際にコンシェルジュ役を体験してみると、話し手のありのままを受け止める、解決策を教える前に気持ちの整理を手伝う、話し手の質問に込められた気持ちに共感するといったことがいかに難しいかを実感した。裏を返せば、これらのポイントを意識することが教育相談において大切にしなければいけない姿勢・技法なのだろう。

② これからの高等学校に求められる授業改善

教科別に分かれての講義・演習だった。

「次期学習指導要領」は、思考力・判断力・表現力に関して言語活動を用いて高めていくことポイントであること。また、アクティブラーニングの視点から『他者との協働』や『外界との相互作用』、『見通しを持った取り組み』や『学習活動を振り返って次につなげる』といったことが必要であるとの説明を受けた。保健と体育の授業の相互作用を意識することは以前から言われていたことであるが、数年後の地域社会や自分を想像し考えさせる授業展開が今後はより必要になると感じた。

「言語活動」については『体験から感じ取ったことを表現する』、『事実を正確に理解し伝達する』、『概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする』、『情報を分析し、論述する』、『課題について、構想を立て実践し、評価・改善する』、『互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる』ということを、受講者が自校で行っている保健体育授業の具体例を出しながら検討し合った。

「評価」については、『指導機会・評価機会を明確にする』、『観察評価は学習期間を保証する』、『１日（１時間）に多数の観点を入れない』ことを確認した。特に、知識・思考・判断はその時間で評価すること。技能・態度は日数（時数）や回数を保証することは、自分自身の体育授業において特に改善しなければならない点であると感じた。

５．おわりに

最近、「健康のありがたさ」を痛感することが多くなった。自分が高校生の時はどうだっただろうか。大人から病気や怪我の話を聞いても「自分だけは大丈夫」という根拠のない自信があった。本校の生徒の中にも、「自分だけは大丈夫」と考えている生徒が少なからずいるように感じている。しかし、当時の自分のように健康について根拠無く「自分だけは大丈夫」と考えるのではなく、「自分は〇〇を意識し、△△に取り組んでいるから大丈夫。」と考え実践できる生徒を育成するのが、保健体育の授業に課されたテーマの１つなのだと思う。

今回の研修で気づかせてもらったことを１つでも多く実践し、今後も授業改善に努めていきたい。